

故事成語 — 蛇足

大きな杯さかづきについだ酒を主人からもらった使用人たちが話し合い、「地面に蛇へびの絵を描いて、真まっ先まへにできあがった者が酒を飲むことにしよう。」と決めた。

一人の蛇へび先まへづ成なる。

酒さけを引きひて且まに之これを飲のまんとす。

乃すなはち左さ手てにて卮しを持もち、右う手てにて蛇へびを画ゑきて

曰いはく、「吾われ能よく之これが足あしを為つくる。」と。

未いまだ成ならざるに、一いち人にんの蛇へび成なる。

其その卮しを奪うばひて曰いはく、「蛇へび固もとより足あし無なし。

子し安いくんぞ能よく之これが足あしを為つくらんや。」と。

遂つひに其その酒さけを飲のむ。

蛇へびの足あしを為つくる者もの、終つひに其その酒さけを亡うしなへり。

〈『戦国策』より〉

一人の男の蛇がまずできあがった。

その男は酒を引き寄せてこれを飲もうとした。

そこで左手で大杯を持ち、右手で蛇に描き加えながら

「私はこれの足を描くことだってできる。」と言った。

その足の絵がまだ完成しないうちに、他の一人の蛇ができあがった。

その男は大杯を奪って言った。「蛇にはもともと足がない。

あなたは どうしてその足が描けるのだ、いや決して描けない。」と。

そしてそのままその酒を飲んでしまった。

蛇の足を描いた男は、とうとうその酒を飲み損ねたのだった。

